

世界短篇小说全集

16

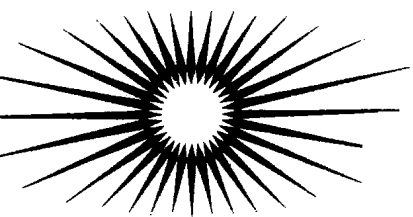
16

／

世界短篇小说文学全集

日本文学／明治・大正

中村光夫 編



集英社版

世界短篇文学全集 16

日本文学／明治・大正



昭和38年10月20日初版発行

編者◎ 中村光夫

発行者 陶山巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二の三

電話 301-3201(代) 振替東京 15653

(落丁・乱丁本は本社で、
お取りかえいたします) 定価 390

日本文学／明治・大正 目次

塵埃——正宗白鳥	142	かたわ娘——福澤諭吉	6
解剖室——三島霜川	149	胡蝶——山田美妙	9
南小泉村——眞山青果	164	細君——坪内逍遙	20
お三津さん——鈴木三重吉	181	拈華微笑——尾崎紅葉	45
一兵卒——田山花袋	192	舞姫——森鷗外	52
夢十夜——夏目漱石	204	對鶴體——幸田露伴	66
硝子間屋——木下杢太郎	220	腹の子——饗庭篁村	83
狐——永井荷風	223	たけくらべ——樋口一葉	89
柳卷——泉鏡花	232	おぼろ夜——齊藤綠雨	114
刺青——谷崎潤一郎	243	春の鳥——國木田獨步	123
薔薇と巫女——小川未明	250	ゆふだすき——川上眉山	131

ある死・次の死――佐佐木茂索	348	朝顔――久保田万太郎	258
藪の中――芥川龍之介	357	山の手の子――水上瀧太郎	274
久米仙人――武者小路實篤	366	哀しき父――葛西善藏	289
姉弟と新聞配達――犬養健	370	道――高濱虚子	296
椿――里見弴	378	青草――近松秋江	301
窓展く――佐藤春夫	382	身投げ救助業――菊池寛	315
伸び支度――島崎藤村	390	城の崎にて――志賀直哉	321
セメント樽の中の手紙――		小さき者へ――有島武郎	327
葉山嘉樹	397	虎――久米正雄	337
業苦――嘉村礒多	401	冥途――内田百閒	345
解説――中村光夫	417		

日本文学

明治・大正

かたわむすめ

福澤 諭 吉



■福澤諭吉

(一八三五年(一九〇二)九州中)の下級武士の子として大阪で生まれた。十五才頃から漢学を学び、二一才の時長崎に出て蘭学の手ほどきを受け、翌年大阪の緒方洪庵塾に入り、蘭学を通じて西歐文明にふれ、封建制度と儒教思想とに対する批判の目をつちかつた。安政五年藩命により江戸へ出て奥平家中屋敷に蘭学塾を開いたが、翌年英学研究の必要を感じて独習し、万延元年遣米使節の一員として成田丸に乗船して渡米、文久二年には幕府使節翻訳方として欧州各地の見聞をひろめ、慶応三年再度の渡米から帰ると慶応義塾を創立した。維新後明治政府のたびたびの招きを断わり、野にあつて啓蒙活動に全力をあげ、英国流の実学を鼓吹して開化日本に大きな影響を与えた。慶応二年に欧米旅行の見聞をもととして『西洋事情』を書きこれを手始めとして多くの西洋案内書をあらわしたが『学問のすすめ』(明治五(九))『文明論之概略』(明治八)とともに、当時のベスト・セラーズとなり、文明開化主義の啓蒙に大いに力があつた。福澤の著述は多方面にわたるが、その実利主義にもとづく国語国字の平易化は、達意の文章に実践され、『世界図説』(明治二)に見られる平易な七五調など、明治文章の平易化と学問の普及に与えた影響は大きい。

福澤の創作的著述『かたわ娘』(明治五)は木版半紙五枚の片々たるものであるが、『寓言』と註してあるように、一種の寓意小説と見られるものである。

或る富家^{トキ}に女子誕生し、かほかたち申分なく、玉の如き子なれども、生れつき眉毛なし。初生^{ハツタマ}のことなればかくべつ人の目にもつかず、おひ／＼月日をおくり、はや八、九月もたち、前齒一、二枚づゝはへけるに、その色黒し。尙又半年を過ぎ一年を暮す内に、上下の齒もはへ揃ひしに、いづれも墨にてぬりたるやうなれども、近所世間の人は尙これにころづかず、たま／＼目にとまることあるも、珍しからぬむしばにもあらなどゝ噂するものもあらず、唯兩親はとくよりこれを思ひ、世に不具なるものも多き中に、眉毛のなきものとは古來人の話に聞しこともなく、あまつさへはじめてはへし齒の黒きとはいかなる因縁なるやと、人しらずひとり心を悩ませしかども、なほ親の欲目にて、眉毛は兎もあれ、齒ははへ替るときかならず人なみになることならんと、七、八歳のころまでそだてあげ、初生齒^{ハツタマ}ものこらずぬけかはりしに、兩親の案に相違し、二度目の齒はます／＼黒くして、墨の如くうるしの如し。

光陰矢よりもはや、はや十四歳の春に至り、初花のつばみもほつるゝ時節、たちゐるまひいとやさしく、あいきやうもこぼるゝばかりの娘盛りなれども、たゞいかにせん、齒と眉毛となり。近所の人々も今はこれを見のがしにせず、竊に指さし噂して、文盲連の口々に、彼の娘の眉毛はいづれにも癩病の筋に相違もあるまじ、憐むべし、玉の顔色も近き内に形を失はん、其癩病は兎も角も、彼の齒の色も怪むべきなり、あの家にはいかなる前世の宿業^{ソクゴ}ありて斯る稀代のかたわ

ものを生みしや、親は代々たどん商賣、くろいたどんを高く賣りしろうい飯を喰ひし報^いか、さなくばこゝに又説あり、あの親達はいかにもちなれども、近處の人が借金^{カネ}の斷りに行きしとき、いつもふくれつらして白い齒を見せたることなき其因果にて、黒い齒の娘を生みしならなどゝて、でほうだいに嘲り笑ふもあり。又洋學先生の説に、眉毛の麗はしくて齒の白きは、婦人の面色を飾るため造物主の特に意を用ひしものなり、殊に眉毛は面の飾のみならず、光線の過劇を防ぐための要具なり、人に眉毛なきときは太陽の光線を上より直に目に受け、眼病の源因となること多し、故に世界中に、熱帶諸國、日光の劇しき土地の人は眉毛濃く、寒帶に近き地の住人は眉毛薄し、かくまで造物主の深き趣意ある眉毛なるに、生れながら其痕跡^{あと}もなきとは天に見放されたる罪人といふべしと。親達はこの説を聞くにつけても一段のかなしみを増し、玉とも花ともたとへん方なき唯ひとりの娘、はや年頃にも及びたるに、この風情にてはとて縁談の出来べきにもあらず、醫者を頼み神佛を祈り、この娘の齒を白くし眉毛をはやす法もあらば、我身代をつぶすはおろか、兩親の命に替へても憚ることなしとて、手を盡し術を極れども、更に其甲斐あることなし。

かくて年月を経るに従ひ、不思議なるかな、世上にて此かたわ娘の評判次第にうすらぎ、二十歳^{はたち}ばかりの年に至りしかば、近處にても全く忘れたるが如く、一人として噂する者もなきゆゑ、兩親も心の中に悦び、然るべき望^{のぞ}を求めてこれに家

を譲り、其身は隠居しけるに、彼のかたわ娘なる者、今は申分なき一家の細君となり、年來の心配も消て跡なかりしとぞ。嗚呼このむすめは、不幸にして幸を得たるものといふべし。外國にて斯る不具に生れつきなば、生涯身の片付も出来ぬ筈なるに、幸にして日本國に生れ、同類のかたわ多ければこそ、人なみに一家の細君ともなりしことなれ。此婦人不具なりといへども、既に人の妻となる上は、その娘の時の由來を知るものこそこれを不具なりといはん。知らずしてこれを見れば、隣の細君が眉をはらひおはぐろをつけたる風に少しも異なるなし。唯となりの細君は剃刀を以て眉の毛をそり、ふしの粉を用ひておはぐろをつけ、錢を費し手間をかけ、まんぞくなる顔に疵を付て漸くかたわになりたると、此娘は生れつきあつらへのかたわづらにて、剃刀を用ひずおはぐろを求めず、やすくと世間のかたわに仲間入して、錢も手間も費さざりしとの相違あるのみ。實に不思議なるは世間の婦人なり。髪を飾り衣裳を装ひ、甚だしきは借着までしてみゑを作りながら、天然に具はりたる飾をば、をしげもなく打捨て、かたわ者の眞似をするとは、あまり勘辨なきことならずや。まして身體髮膚は天に受けたるものなり。慢りにこれに疵付るは天の罪人ともいふべきなり。

(明治5・9)

蝴

蝶

山
田
美
妙



■山田美妙

(一八六八—一九一〇) 本名武太郎。東京神田に生まれた。東大予備門に入り、明治一八年尾崎紅葉、石橋思案等と文学同好の結社硯友社を結成、機関誌『我楽多文庫』を発刊した。一九年予備門を退学、翌年婦人雑誌『以良都女』の編集同人となった。言文一致の歴史小説『武蔵野』を『読売新聞』に連載、その内容の悲劇的浪漫性と、新奇な文章技巧によって注目を浴び、二一年最初の短篇集『夏木立』を刊行して大いに文名があがり、金港堂に招かれて文芸誌『都の花』の主幹となったが、紅葉とは感情の疎隔を生じた。『蝴蝶』は『国民之友』第三七号(明治二二・一)の附録に寄せたもので、坪内逍遙の最後の小説『細君』と森田思軒の『探偵ユーベル』が同時に載った。当時雑誌に短篇小説が三種も載ることは珍しく、美妙の作の人氣とともに話題を呼び、短篇流行の端緒となった。『蝴蝶』は作柄そのものよりも美妙の注文によって添えられた渡邊霞亭筆のさし絵が評判となり『裸蝴蝶』と喧伝された。この木版墨刷のさし絵は、青年鎧武者に裸体の女を配したもので、海から上った蝴蝶が、わずかに腰部を濡れた着衣でおさええている窈窕たるさまを描いたものであった。『蝴蝶』の新奇な文体とあいまって、大胆斬新なこの試みはたちまちセンセーションをまきおこしたが、美妙は、曲線の配合の具合、『裸体ほど美の上乗なものはありません』と述べ積極的に裸体美論を主張して、裸体画の一般化においても先駆者としての栄えになった。美妙は初期言文一致体を創始したり、新体詩をおし進めたり多彩な創作的貢献によって文壇の寵児となったが、しだいに衰退に向かい、私行上の問題を指弾されて文壇的に葬られ、晩年は不遇のうちに病死した。

國民の友の附録にするとて御望みが有つたため歴史的小説のみじかい物を書きました。が、實の處これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒では有りません。匆忙の中の作だの何だのと遁辭をば言ひません、只是が今の主人の實の腕で、善惡に關せず世間の批評をば十分に頂戴します。猶この後には春のや、思軒の兩「しんうち」が扣へて居ります。それ「比較は物の價格を定める」大牢の前の食散らしは或は舌鼓の養生にも爲りまじやうか。一座早く出た無禮の寓意（も凄まじい）は實にこゝに在るのです。

脚色は壇浦没落の後日です。安徳帝は實に御入水にならなかつたといふのがまづ多數の説で、文化十四年三月、攝津國能勢郡出野村の百姓辻勘兵衛が幕府へ一つの古文書を持出した事が有つてそして其古文書は經房卿と言つて幼帝に供奉して逃げた人の自筆で書いてあります。是等は白川少將も望んで一覽し、また京都で日野大納言も懇望して見た事さへあつた程で、中々容易ならぬ簡條なのです。今この小説は脚色をその經房の古文書から抜いて一毛一厘も事實を枉げず、ありの儘に書いた物で、その他日向に御逃れなつたの、又は阿波に御逃げに爲つたのといふ方の説は爰で更に取用ひませんでした。

中の人物の言葉は矢張り武藏野と同様つとめてその時代の口氣を寫しました。時代物に必ずその時代の言葉をを用ひるといふことは全體たしかに是と言つて褒めるほど

の事でも有りません。たゞ目先を變へただけです。

明治二十一年十月

美妙齋主人

其一

勇む源氏、いさむ濱風、無情、何のうらみ、嗚呼今まで白旗と數を競つて居た赤旗もいつか過半は吹折られたり、斫折られたり、はやその色をば血に譲つて仕舞つて、たゞ御座船の近處の邊に僅に命脈を繋いで居るありさま、氣の故か、既に靡いて居るやうです。

海は一面軍船を床として、遠見の果てが浪に搖られて高低さへ爲なければ水が有ると思はれません。雨のやうに箭が降注いだのは戦争がやゝ熾に爲つた頃（まだ運命がいくらか頼もしかつた内）だけで、今はその雨も敵の凱歌と共にあがり掛つて、たゞ手近な太刀討と組討と確倒しがあちこちに始まるばかり、折れて水に陥つた箭の死骸、それも討死した士卒の軀と共に幾百となくむらがつて浪に弄ばれて居る體たらく、さながら堰か水門に塵芥が集まつたやうです。今少し前でした、能登字（教經）が血眼に爲つて源氏の旗下へ飛込んだのは。蹴散らし、拂ひ倒して見る／＼敵の中へ割つて入つたうしろ姿のいさましき、かなぐり捨てた、鎧の袖の切れ目の絲は微かな波を空中に打つて、亂髮に勢を添へて居て、そして之が亂入するや否や、敵にはかに噪ぎ立つて、主人九郎（義經）が危いと思つたか、やゝ進んだ兵の内でも、旗下

へ引返したもののさへありましたが、いつかそれも静まつて更に立直る反動の力のすさまじさ、瞬く間に敵は早御座船ちかく近寄ります。「能登字だに死にたるよ」。だれ言ふと無く傳へる此聲、こゝろ細さは増すばかりです。新中納言（知盛）の顔を見るさへ涙です。泣立て、譯も無く主上（安德帝）に取絶る女房どもの有様には萬夫不當、平家の柱石と聞えた新中納言の唇もわなゝいて、着馴れた鎧の威毛にやゝ止る露の雫、それを飛沫と言ふだけ哀れ、だれが永別の涙で無いと言ひまじやう。知盛の今日のむねぐるしき、わざと從容として無理に笑顔を賣るものの、その笑顔は冬の寒菊、無情の風を待つのみです。主上に對する眼、女房どもに向ける目眦、いづれ優劣なく無念の露を宿して、否帯びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが次第に紅く爲つて行き、いつの程にか髪の毛も針を植ゑて居るやうです。

かなはぬまでもと思ふ心は今でも知盛の胸には充ちて居ますから一寸歸つて主上に拜謁するや否や更にまた引返しては敵に近付いて士卒をはげまして居ます。

敵は次第に御座船に近づくと、……また矢が雨のやうに爲る、……前後には呻り苦しむ聲。見るに目も暮れ、心も消えます。はや其處此處とも亂れ果てました。最前から幾度も心元なきに舷頭へ立出ては戦争の様子を見て居た二位尼もこゝで心を決したと云ふ體で竊に御座船の奥の間へ源典侍、侍從經房、原田大輔判官種長、因幡郡司景家、及び右大將基方、大納言典侍、勾當内侍、阿波内侍の八人を呼びました。

それから何を話して居るか元より祕密にしたことと見えて次の間へ行つて聞いてもよくは聞えませんが、たゞ非常に嘆きかなしむ聲がします。蜩蝶と言つてことし甫めて十七になつた宮女、これは京都から此處までも常に源典侍に従つて居る美人ですが、しきりに怪しく思ふのあまり近寄つて心を静め、よく聞けば其内に門院（建禮門院）の御聲として涙にうるんだ氣はひが洩れて來ます。

「さればとて、喃、二位」、紛れも無い門院の御聲です、「御門（安德帝）のむづがらせ給はんを……如何に、是のみにては」。

「御心細くも侍らん。然ればあれども源氏あざむかんには二位こそ此上なきものなるを」。

是はたしかに二位の聲で、跡は鼻をすゝる音が聞えるばかりです。聞けば表の方で女ばらも立噪ぐやうです。「すはや源氏」といふ聲に蜩蝶も立聞しては居られません。足を抽いて立歸つて外を見れば、なるほど源氏は既に間近く寄りました。が、頼母しい、それでも猶名を惜しむ士卒どもは防戦して寄付けまいとして居ます。「かくては争でか逃れ果つべき。早く心をするこそ好けれ」、一度蜩蝶も心をば斯う決しましたが、さて又主上や門院の御身の上が氣に爲つて氣に爲つて堪りません。暫時舟の端にたゞずんで（今は矢を恐れもしません）、四方を見回して居ましたが、思付いてまた奥の方へと立歸つて行く出合がし見れば二位尼は主上の御手を引いて其處に立つて居ます。

「蝴蝶、いくさは如何にぞや」。

問はれては墓々しくも言へません。

「口惜しうこそ。みそなはせ、御船ちかきに源氏も來ぬる」。

「つなぎ止めしも甲斐無かりき。いざさらば我もなどてやたゆたふべき。いでや人々もろともに」……

言掛けてはら／＼と涙を落して蝴蝶をじつと見詰めたまゝ、やゝ身繕ひをする體たらく、如何にも合點が行きません。

「人々もろともに、そも如何に爲せたまふ」。

「もろともに水にこそ」。

「今はや入らせたまはんとや、そは勿體無し玉體を」。

「玉體と和女も思へるよ。これは如何に」。

言つて尼が主上の被衣を取退ければ是は主上と思ひの外、知盛の子息です。蝴蝶も之には駭きました。

「こは、そも。そも／＼主上は」。

「今はや落ちさせ給ひけり。かくてぞ敵を欺くべき」。

「はや落ちさせ給ひけり。あまりの意外に息もせはしく、

「女院の君も諸共に」。

「然なり、供奉しまゐらしゝは先き程呼びぬる八人になん。和女もいざ疾く……はや事迫りぬ……ためらひ給ひそ、落延

びんほどは落延びて御門を助けまゐらせてよ。爰に心な残し給ひそ」。

言ふ内人の叫ぶ聲は既に間近く聞えて來ます。

「源氏入來る、間もあらじ。刃にかゝるはうたてきを……蝴蝶、疾く／＼……いざ疾く／＼」。

二位は切りに急立て、跡の蝴蝶の返事を耳にも入れず、何か錦の囊に入つた御劍めいた物を捧げながら右に主上(假の)の御手を引き、早足に船端にさしかゝれば……威しのためか……敵から來る箭は隙間もなく降注ぎます。

「喃、しばし待たせたまへ」。

蝴蝶は跡から追つて來ました。が、無残、及びません。蝴蝶が船端まで來た頃にはや水煙りが……

「すはや入らせたまひしよ。呟いたのは是ばかり、流石に生死を構はぬ身にも又何處やら箭玉の雨は恐ろしく、急にまた踵を返して横の船端から屹と見れば、主上の影は見えませんが、源氏侍たちが小舟に乗つてはるか向ふへ漕いで行きます。死ぬ氣は蝴蝶も有りません。追付いて供奉が爲たういたします」。

片手は涙、片手は周章、急に一人の雜兵を呼掛けて手を合はさぬばかり、

「逃れん。喃、漕ぎてたべ、小舟にて」。

命ぜられて雜兵も再議に及ばず直に小舟を引寄せて蝴蝶を乗せて漕出しました。櫂は折れてありません。仕方なく薙刀で一心不亂に漕ぎました。

前後左右は皆源氏です。が、わづかの仕合せ、皆御座船を目掛けますから落人も案外平易に逃れます。けれど肝を冷したのは幾度ですか、浪も荒ければ四方に船も多く、思ふやうには進めません。それのみか、わるく爲ると典侍の居る船を見失ひます。折々は僅の目を偷んで懐かしい今までの御座船

を見返れば、その今日まで皇居とした御座船には雑人ばらが早亂入して……きらめく劍戟の影のするどき。

典侍の方の船に心を注げると同時に身の周圍に敵が来るかと氣を配る混雜の間、ことにあちこちに簇がつて居る敵の眼を掠めることですから自然船も典侍の船のすぐ跡に跟く事が出来ません。或は右へ駈隔てられたり、あるひは左へ迂回させられたり、終に、あゝ、やゝ敵の眼の遠く爲つた處へ来て、やれ安心と思ふと一途に典侍の方の船の影は……折角の骨折も水の泡……どこへ行つたか見えません。弱りました、これには蛸蝶も。船はやゝ見れば古屋の二三軒ある磯の邊の近くへ来て居ます。傍には漂泊して居る、主の無い兵船も一二艘あります。

「喃、辛く命は助かりつ、されど是より如何に爲ん」。

話掛けるといふ風でも無くて蛸蝶は呟きました。
「如何に爲ん。何をか宜ふ。漕もて來ぬる骨折の賃、いざおのれに賜はずや」。

頬髯を撫でながら宛も傲慢な體で而も冷笑といふやうな氣色をあらはして言ひます。

蛸蝶は流石に眞面目です。

「何を」。

「何をなソ、傍へすりより、「骨折の賃にこそ。されど玉にも黄金にもあらず、たゞわが妻になりたまへ。こやなどて駭きたまふ、あたりに人の見る目も無きを」。

思ひの外の無禮な言葉、婦人ながらも軍馬の間を経て來た

蛸蝶、これには赫となりました。物をも言はず睨付けるを雑兵は更にかまひません、桂衣の袖を取らうとする、今は蛸蝶もこらへかねて、振拂ふや否や、身を躍らせて近い處の船に飛込まうとは爲ましたが、運わるく足が滑りました。滑りました、眞逆さま……跡は水煙と呆れた雑兵の顔ばかりです。

其二

清くて、優美で、そして愛らしいものは六七歳の少女と浦の春景色でも有りまじやう。その眉のまだ纖くて薄く、その顔のまだ肥えて固まらず、薄絹の頬に笑靨の泉をたゞへて、こぼさうとは思はずに愛嬌の露をこぼす有様を見ては誰が一片きはめて高尚な愛情を起さずに居られまじやう。夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味はふといふ有様で反射の綾模様を浮織にしてゐる古屋の板びさし、しかも昨夜過ぎた春雨の足跡をば銀象嵌とも見立てられる蛸牛のぬめりに見せて居ながら、それで尙水際立つて見える工合の美しくしき、餘情は以心傳心です。

壇の浦つゞきの磯づたひ、白沙の見ゆきを鏡として翠色の色上げをば生溫い浦風にさせながら思ふまゝに悠然と腹這して居る黒松の根方に裸體のまゝ腰を掛けて居るのは、前回に見えた蛸蝶といふ少女です。實に西の風に東の日和。花をたしなめる風雨を見ては誰が實を納ばせる末を思ひまじやう。わづか離れた處の修羅の巷はこゝに昏樓の影も留めず、一網

の魚に露命を恃む、いはゆる質朴の静かさばかりが苦屋の春を鎖して居ます。波にもてあそばれて居る鷗。可愛らしい銀色の足でちよろ／＼と磯へ這上がつて来るさゞ浪。血腥いといふ言葉は爰では只魚の料理で僅に悟るといふばかり、すべて景色が、言ふもおろか、さて空氣を汚すべき非理の福原の別荘も、否、別殿も、有難いこと、まだ有りません。

濡果てた衣服を半ば身に纏つて、四方には人一人も居ぬながら猶何處やら吾と吾身へ對するとでも言ふべき羞を帶びて、風の嘯きにも、鳥の羽音にも耳を側てる蝴蝶の姿の奥床しき、うつくしき、五尺の黒髪は舐め亂した浪の手柄を見せ顔に同じく浪打つて多情にも朝櫻の肌を掠め、眉は目蓋と共に重く垂れて其處に薄命の怨みを宿して居ます。水と土とをば「自然」が巧に取合はせた一幅の活きた畫の中にまた美術の神髓とも言ふべき曲線でうまく組立てられた裸體の美人が居るのですもの。あゝ高尚。眞の「美」は即ち眞の「高尚」です。

見互せば浦つゞきは潮雲りに播蓉れて、その懐かしい元の御座船の影さへ見えず、幾百かの親しい人の魂をば夕暮のモヤが秘め鎖して居るかと思はれるばかり、すべて目の觸るゝその先の方は茫漠として慘ましく見える鹽梅、いとゞ心痛の源です、否、「源」といふのも残念な。

「そも如何にすべき。如何に爲らせ給ひしやらん、事無う御幸まし／＼つるよ。覺束無。さるを猶この身だに斯くて御ン跡をも失ひつ、いつくに頼りて便りを得ん。苦屋の外は無き

ものを、もしは敵に見認められなば、逃れ来し心盡くしも泡なれや。人目を避けて山路より御幸ますとや聞きぬるに……されば伯耆や過ぎさせ給はん。よし、さらば、如何にもして御跡を慕ひまゐらせん。久しく時を移すは甲斐なし。命めであうてかく蘇りつ、疲れは有るとも何ならん。いでや苦屋に哀れを請ひて蟹の衣だに乞ひ受けてん」。

雄々しくも屹と思案を定めました、さて其處が乙女のあるべき、まだ裸體を人に見られる恥かしさに、何の思慮もなく、更にやゝ暫くは松の根に腰を掛けて居るその處へ聞えるのは兼ねて幾度も聞馴れた鎧の袖の囁きふ聲です。

驚いて見返つて更に一入、さて穴へも入りたい程になりました。鎧の音は一人の武者で、武者、しかも其人は兼て蝴蝶が陣中で名を知つて見覺えて居る同じ平家の旗下の二郎春風といふ人で、また而もその人は蝴蝶が常から……おゝ、つれない命……人知れずその爲に戀衣を縫つて居た者です。

駭きましたが逃げられません。逃げたくは有りますが身は縮みます。俄に顔は……はてどうでも宜いのに……潮路の紅を借りて来て……見れば、今日を晴と粧つたその武者ぶりの奥床しき、村濃の鎧に白の鉢巻、目は涼しく、口は潤つて……「思掛けぬ……蝴蝶ぬし、御身のみにてましますか」。

あゝ身が慄へます、近寄らずに二郎は尋ねます。

返辭は有りませんので二郎は重ねて、

「見たまへや、此身も落ちて來ぬるを。主上は如何に爲らせたまひし」。